

空手道詳説（15）

第2章 沖縄史の概説

4 沖縄史の概略（その3. 第二尚氏王統の誕生）

(7) 尚円王を取り巻く歴史の虚実

ウ 尚宣威王退位の疑問

尚円が第一尚氏王統を倒して王位に着くと、宇喜也嘉（おきやか、1445～1505年。世添大美御前加那志が正妃としての名）は、王の寵愛を笠に着てあらゆる画策や謀略を用いて正妃となり、王宮内で絶大なる発言力を持つようになったが、第二尚氏初代王の尚円は、即位から7年を経た1476年8月、61歳で薨去してしまった。当時によれば、それでも長生きの方だったであろう。

宇喜也嘉は、自分が生んだ子の真加戸樽金（まかとたるがね、1465～1527年）を第2代王にせんものとあらゆる手段を講じるが、尚円王の遺言ともいえる言葉、『樽金は未だ若い。次期の王は我が弟の超来王子がよかろう』を重視した重臣たちは、躊躇なく尚円弟の超来王子が尚宣威王（1430～77年、在位：1476～77年、）を王に戴いた。尚宣威王は47歳であった。

この第2代王誕生に、どうしても気持ちが治まらないのが宇喜也嘉である。幾ら言い張っても我が子は数え年13歳であり、尚円が言い残した言葉を見捨てできないとあっては、重臣たちの決定に手も足も出なかったのである。

もしも、尚宣威王の治世が長引くならば、尚宣威王の血筋が次の王位を継ぎかねないとの懸念も強く、宇喜也嘉は焦りに焦ったのであろう。

尚宣威王が即位して丁度半年後の1477年2月、陽神の君手摩（きみてずり）が祝女（のろ、公的祭祀を司る女神職）に憑依（ひょうい）して現れた。君手摩はニライカナイ（海の深淵、海の彼方、地下にある）に住まうとされ、海と太陽を司る琉球国の守護神で、琉球王国存亡の機に降臨すると言い伝えがあった。沖縄県や鹿児島県奄美群島の各地に伝わる異界概念のひとつである。

祝女に君手摩が憑依したと聞いた宇喜也嘉は、神事の社会的な力は女にあるという背景を利用し、新しい琉球国王祝福する神事を執り行うよう下命した。その舞台になった首里王城の正殿は、明国や東南アジア方面から渡った特上の宝物を連ねて飾り、

過去になかった完璧さをもって設営され、最高位の祝女を中心とした神事が執り行われることになった。

尚宣威王は、君手摩は新王を祝福するために現れたと喜び勇み、太陽が昇る東を背にして玉座に座り、その脇には久米中城王子だった樽金（後の尚真王）を立たせ、祝女たちが現れるのを今か今かと期待に心躍らせて待っていた。

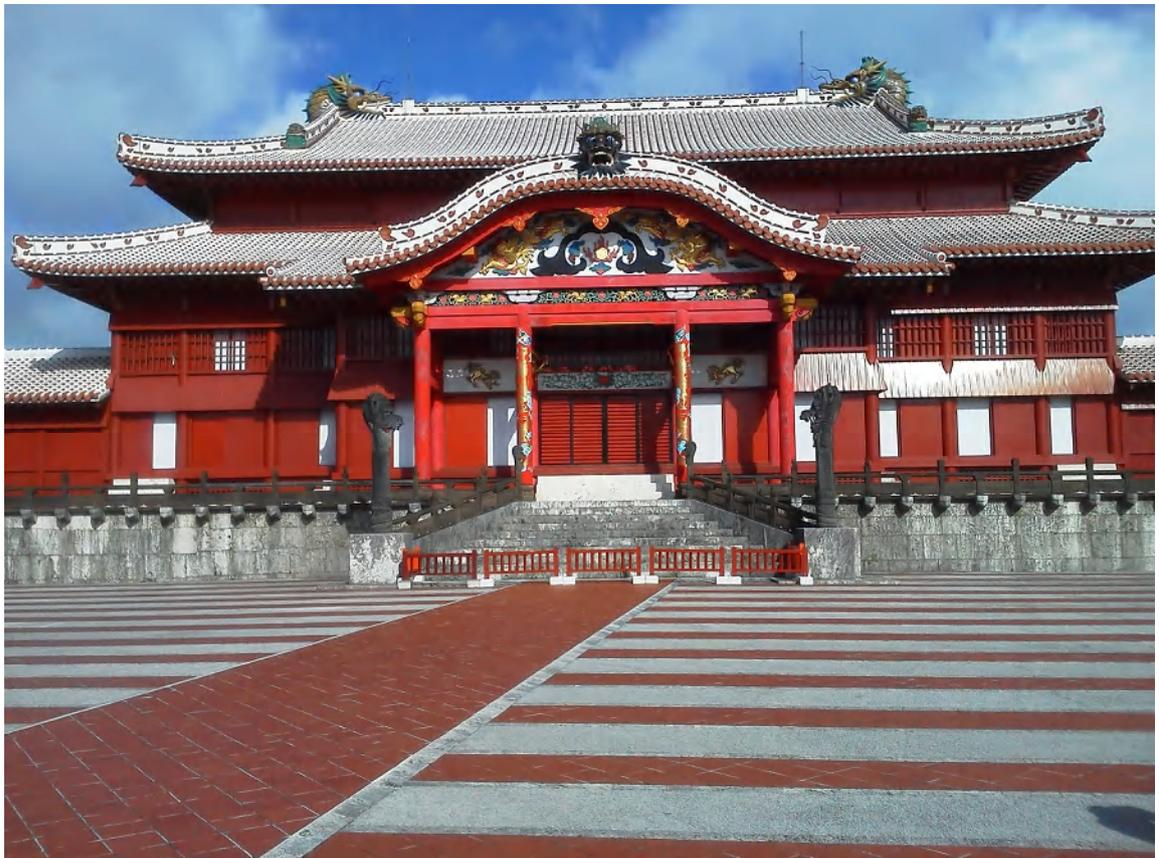
すると、祝女たちの入場から異変発生である。白衣をまとった彼女たちは、本来首里城正殿の御庭（うなー）に立つ時は、朝日を背にして玉座に座る王と対面するよう西側に立つて神事を行うのだが、何故か全員西側を向いて王に背を向けたのである。

どうしてと訝る尚宣威王を始め居合わせた重臣たちは、何事が起こったのか見当もつかず固唾を飲んで見守る中、君手摩に扮した祝女から御託宣が下った。

『首里おはるてだこうが 思い子の遊び みもの遊び なよればみもの』で、大意は「首里におられた太陽王が、可愛く思ってきた子の遊びを、眺め見ておられることだ」であった。

王府高官や祝女たちの前で、予想もしなかった御神託を下された尚宣威王は、衝撃のあまり玉座から崩れ落ちてしまった。やっとの思いで立ち上がると樽金の手を取り、それまで自分が座っていた玉座に導いた。尚円王の弟ながら、直系の血筋でない者が王位に着いたのを、亡き兄王や天が咎めていると考えたのであろう。

在位6か月にして退位し、領地の越来に隠遁した尚宣威は、それから間もない7月、失意の中で寂しく逝去した。



沖縄戦と戦後の琉球大学建設で破壊され、1992年（平成4年）に復元された首里城正殿と御庭（うなー）

さて真実はどうだったのかというと、以下である。

宇喜也嘉には焦りがあった。穏やかで人のいい尚宣威王が人臣の信頼度を高め、善政が評価され定着してしまわないか。そもそも、形振（なりふり）構わない陰謀と犠牲者を出してまで阿漕（あこぎ）な手段を駆使し、競争相手を排除して王妃の座を得た身である。我が子が王になるまで歳月が経過すれば、旧悪が露見してしまう可能性だってあるかもしれない。そうれば、親子ともども命が危い。時を待ってはられない。

そこで出した悪知恵である。尚円王亡き後の宇喜也嘉は、未だ発言力は絶大ではなく、表向きの対抗手段で叶わないと見たのである。神のお告げが絶対的な決定力を持つ琉球ならではの手法を使うことにした宇喜也嘉は、尚宣威王が亡き兄王の寵妃に気兼ねしている内に、一気に交替劇を成功させようという大きな賭けにでたのである。

神と交信できたのは女に限られていたし、以前から祝女集団と緊密な関係にあった宇喜也嘉にすれば、祝女たちと密室で描いた君手摩神事のシナリオに手抜きはなかった。

シナリオどおりに進んだ神事に、脅威の念に包まれ身動きとれなくなった尚宣威王こそ、哀れそのものと言えよう。

退位から6か月後に、尚宣威は悲運にも死を迎えた。これとて、越来城に宇喜也嘉が送った配下により毒を盛られ、口を閉ざされたのであった。

失意のうちに世を去った尚宣威王には、二男一女があった。長子が父の跡を継いで越来王子となったが早世したため、二男がその跡を受け家督を継いでいる。娘の居仁（正没年不詳）は、第3代尚真王の妃となっているから、二人は従兄弟同士となる。

この様子を見る限りでは、尚宣威王は退位させたものの領地は安堵され、娘を王妃に迎えていることを考えるなら、一見両家の間には険悪な感情は残らなかったように見えるが、宇喜也嘉は警戒心を緩めることなかった。

なお、君手摩の「君」は祭祀を行う女のことで、「手摩」は手をすり合わせて拝礼する意からと前に書いたが、君手摩は王の即位を祝う儀式そのものであったという説も有力である。

エ 尚真王即位後の宇喜也嘉

真加戸樽金が尚真王（1465～1527年、在位：1477～1527年）となり13歳（数え年）で第3代王に即位すると、33歳だった宇喜也嘉は若年の王を助け、母后として権勢は倍増してほしいままに実権を振りはじめた。

全て王を飛び越えて采配を振り、王を遥かに上回る派手さをもって出回り、正に、「牝鶏鳴いて、国滅ぶ」の譬えのとおり権力を振りかざした。

尚真王が即位した後の宇喜也嘉には、初代王の妃であり現王の母后にあるまじき様々な噂が立った。陰でとやかく言う人はいても、面と向かって諫言でもしようものなら、たちまち死を賜るだろうと誰しも思っていた。それよりも宇喜也嘉の権力に群がり、甘い汁を吸う方が保身につながると思うのが当然と、そんな風潮が蔓延したの

が、一層宇喜也嘉を増長させ放埒さを拡大させたのではないだろうか。

遂に、宇喜也嘉は自らの閨に、次々と気に入った男子を招き入れるようになる。

何れも名門士族ばかりで、尚円王糟糠の妻である夫人を殺めたのも、宇喜也嘉にそそのかされたそんな輩でなかったかと疑いを持たざるを得ない。

火遊びの結果は当然の報いを生む。遂に、宇喜也嘉は子を身籠り出産する事態に至った。

未だ成人していない若き尚真王にすれば、困惑と汗顔の極まりであったろうと想像できるが、こうなれば誰にも宇喜也嘉の行状は歯止めの利かない暴走を繰り返すことになる。元来、琉球人は節操の堅い風習を持っていたはずなのに、調子づいた宇喜也嘉は二度三度と重ねて同じことを繰り返し、尚真王には父親の分からない弟妹が何人もできてしまった。

世の中には、絶大な権力を握った気性の激しい女ほど怖いものはない。洋の東西を問わず歴史が語る事例は枚挙にいとまがない。彼女らは何を仕出かさか分からない暴走によって、臣民を苦しめ、あるいは国を滅ぼしたのである。

偉大なる前王の妃にして現王の母が、前代未聞の出来事によって悪評を生み悩まされながら、尚真王は50年間という最長年にわたる統治のスタートを切ったのであった。

尚真王は英邁で決断力に優れた青年となって育ち、後には一代で国の形を整備した賢君と謳われることになる。

しかし、中山世鑑には、他の王に比べて尚真王に関する記述は極めて簡素なのは何か、羽地朝秀の意図を伝えるものはない。

右の絵図は、王宮に残されたと伝わる宇喜也嘉と幼い尚真王の画像である。



(つづく)

参考文献等（発行年月は著書に記載のまま）

- ・ 宮城栄昌著「沖縄の歴史」、昭和43年11月26日初版、日本放送出版協会発行
- ・ 新里恵二著「沖縄史を語る」、1970年9月1日初版、株勁草書房発行
- ・ 池田奉秀著「古流現代空手道集義第一巻」、昭和50年7月25日初版、日本空手道常心

門出版部発行

- 喜納大作、上里隆史共著「琉球王国のすべて」、2012年6月20日初版、(株)河出書房新社発行